

Cyperus hyalinus は学名が示すように膜質で脈のはっきりした穎を持ち、果実が左右に扁平で、小穂軸が基部で節するという特異な形質を持つ。この特長はヒメグ属のそれであって、*C. hyalinus* は花序が散開して傘形となるほかヒメグ属と撰ぶ所はない。特に葉の解剖所見はヒメグ属のそれに完全に一致する。しかし花序が頭状であるか散開するかの違いはカヤツリグサ科では重要な特徴ではなく、現にヒメグ属にも *Kyllinga transitoria* (Kükenthal, Pflanzenr. 4(20), 101 Heft: 574, 1936; sub *Cypero*) T. Koyama, comb. nova の如く、散梗を具えた種もあり、*Queenslandiella* 属は成立しない。従って本種をヒメグ属に収める。よって、

***Kyllinga hyalina* (Vahl) T. Koyama, comb. nova.**

Cyperus hyalinus Vahl, Enum. Pl. 2: 329, 1806.

Mariscopsis hyalinus (Vahl) F. Ballard in Kew Bull. 32: 457, 1932.

Queenslandiella hyalina (Vahl) F. Ballard in Hook., Icon. Pl. 33: t. 3208, 1933. (ニューヨーク植物園及びニューヨーク市立大学)

○ 伊豆大島自生のビャクシン類 (常谷幸雄) Yukio JOTANI: The native junipers of Isl. Oshima, Prov. Izu

1887 年植物学雑誌 Vol. 1 に掲載された、大久保三郎氏の「伊豆巡島記」によると、p. 98 に同年 4 月 18 日伊豆大島差木地村から野増村に至る間で、ハイネズを採集されたことが記されているが、1901 年松村任三博士はこれを *Juniperus taxifolia* Hook. et Arn. として同誌 Vol. 15, p. 138 に報じ、東京大学総合研究資料館植物部門にはその標本が現存し、標本台紙の名箋のすぐ上の部位に「殆ト葉ヲ失フ 16/viii/1900」と記されているが、現在学名の *taxifolia* と書かれた部分が線をひいて消されている。

1912 年小泉源一博士は、同誌 Vol. 26 に「伊豆大島植物地理略」を登載し、(乙)植物目録中 p. (214) にビャクシン *Juniperus chinensis* L. とハヒビャクシン *J. chinensis* var. *procumbens* Endl. を記録され、同部門に小泉博士が同年 3 月 18 日伊豆大島で採集された各 1 枚の標本が残されており、一つは *Juniperus chinensis* L. ビャクシン、一つは *Juniperus chinensis* var. *procumbens* Endl. ハヒビャクシン、ソナレと記された名箋が貼ってあるが、これら 2 枚の標本は後の研究者により、名の一部が消されたり加筆されたりしており、前者は *chinensis* L. ビャクシンの部分が線をひいて消され、かわりに *conferta* Parl. と記入せられ、また名箋のすぐ上の部位に *Juniperus taxifolia* Hooker et Arnold シマムロ (T. Nakai) と記され、それが線をひいて消されている。後者は *chinensis* L. が線をひいて消され、かわりに *conferta* Parl. var. と記入され、ビャクシンに線をひいて消してネズと記入され、ソナレに線をひいて消してあるが、名箋のすぐ上の部位に *J. conferta* var. ト考フ (H. T.) (Wilson 氏=依レバ大島=ハそなれナシ) と記され、また *J. conferta* var. の下に

Juniperus chinensis と記入し、*chinensis* の部分が線をひいて消されている。しかし前者には葉の基部に関節があるためにこれを *Juniperus chinensis* L. イブキに当てることは困難であり、さきの松村博士により *J. taxifolia* Hook. et Arn. とされたものと共に、後に 1917 年 3 月 E. H. Wilson 氏により元村（現元町）海岸で採集され、*J. conferta* Parl. var. *maritima* と命名されたものに当たると考えられる。後者については著者は未だ大島でその自生と見るべきものに接したことがなく、強いてこの標本に似たものを求めるとすれば、東海岸秋ノ浜や京津集落附近に見られる *J. chinensis* L. イブキであり、これらの多くは老木であって、葉は鱗片葉からなるものが多いが、試みに若木の針状葉をつけた枝で、小泉博士採集の標本に似たものを採り、腊葉にして比較して見たところ、形態的に互によく符合することを知ったので、小泉博士採集の *J. chinensis* var. *procumbens* Endl. ハヒビャクシン、ソナレとされている標本は、*J. chinensis* L. イブキと判断される。

このように小泉博士採集の 2 枚の標本は、その後の研究者により訂正や加筆が行われており、これらを同時限で考えることには無理があると思われるが、何れにしてもこの 2 枚の標本につけられていた名が、先学により必ずしも素直に受け入れられなかったものといえる。もしも一つの憶測がゆるされるならば、それは自生地での形態や生態から見て、後に *J. conferta* var. *maritima* Wils. とされたものを、*J. chinensis* var. *procumbens* Endl. とし、*J. chinensis* L. を *J. chinensis* L. とされたものが、名箋が入れかわって貼られたのではないかということである。

1917 年中井猛之進博士は同誌 Vol. 31, pp. 20-22 に、*J. chinensis* L., *J. procumbens* Sieb., *J. taxifolia* Hook. et Arn. について記録され、それらの産地として伊豆大島をあげ、共に小泉博士の採集品によったものとされており、*J. taxifolia* Hook. et Arn. とされたものについては概ね見当がつくが、小泉博士採集の標本は先の 2 枚しか見当たらないので、他のものはどの標本によられたかはっきりしない。

1922 年中井博士は同誌 Vol. 36, p. (104) に、「豆南所見」を登載され、同年 3 月伊豆の南部で *J. chinensis* L. の自生を確認し、旧日本のフロラに編入すべきものとされ、また同じく「はひねずノ二形」について、同 p. (105) に「一ハ葉先ガ著シク針状ニナッテイルノデ其レガ基本種デアル。今一ツハ先ハ尖ッテイルガ針状ニナッテイナイノデ var. *maritima* Wilson ト云フ。(此名ハ E. H. Wilson 氏が来朝ノ際実地調査ヲシテ附ケタ名デアルガ未ダ学界ニ発表サレテイナイ。単ニ余ト談話ノ際ニ斯ク命ジタト云フノデアル)。」とし、「var. *maritima* ノ方ハ伊豆大島、伊豆ノ海岸、房州ノ沿岸等ニハひねずト混生シテ居ル。」と述べられているが、同部門には中井博士が 1940 年 12 月に、伊豆大島京津海岸及び大島公園で採集し、*J. procumbens* Sieb. と同定されている標本があり、これは 1950 年佐竹義輔博士により *J. conferta* var. *maritima* Wils. と訂正されており、中井博士はまたこれを *J. luchuensis* Koidz. オキナ

ワハイネズと同じものと考えられたようで、1926年同誌 Vol. 40, p. 161 に、直接大島には触れておられないが、*J. luchuensis* Koidz. は *J. conferta* Parlat. に最も近いものであり、房総半島から沖縄にかけて分布することを述べ、1930年伊豆大島で採集されたものを、*J. luchuensis* Koidz. と同定されていることで理解できる。1954年草下正夫博士は「増訂 邦産松柏類図説」p. 195 に、伊豆大島産のこの種のものを *J. luchuensis* var. *maritima* (Wils.) Kusaka とする見解を示しておられるが、1962年佐竹博士は国立科学博物館報告 6, pp. 179-193 に、*J. conferta* var. *maritima* Wils. オオシマハイネズ（ハマハイネズ）と *J. luchuensis* Koidz. オキナワハイネズは同じものであり、これを小笠原諸島産のシマムロの変種と考え、*J. taxifolia* var. *luchuensis* (Koidz.) Satake の新組合せを提唱せられ、これは琉球から九州種子島を通して紀伊南岸、渥美半島の南端、伊豆半島の南端、伊豆七島から房総半島に分布し、本州南岸ではハイネズと接触するか混生すると述べられている。1960年林弥栄博士の「日本針葉樹の分類と分布」p. 184 によると、ハイネズ *J. conferta* Parlat. は種子島のほとんど全島に分布し、その天然分布の南限地は門倉岬附近であるとされ、著者は未だ門倉岬産のものについては知見を有しないが、同島の須崎、箱崎、納官などの海岸で採集した資料は、何れも *J. conferta* Parlat. とは異なるものと考えられ、葉の表面に中肋がはっきりと現われて、その両側に気孔群があり、中肋部の表皮下には厚膜組織が発達し、その点はオオシマハイネズやオキナワハイネズに似ているが、葉の先端は著しく尖って針状をなし、この点はハイネズに似ており、1953年11月大井次三郎博士らにより種子島で採集され、*J. conferta* Parlat. と同定されて、同部門に収められている標本もこの種のものである。

以上伊豆大島産の従来から知られていたビャクシン類に関連して卑見を述べたが、1957年7月著者は伊豆大島東岸フノウの滝下の岩礁上で、*J. conferta* Parlat. ハイネズと思われるものを採集したが、1976年3月同地域で開花中の雄株を見だし、資料を得てこれを確認することができたので、新たに伊豆大島のフロラの一員として加えることにする。寺崎留吉氏の「日本植物図譜」（1933）第1926図にはひねず *J. conferta* Parlat. として示されている伊豆大島産のものは、記述及び葉の断面図から見てオオシマハイネズと判断される。*J. procumbens* Sieb. ハイビャクシンについては、伊豆大島では未だその自生は確認されていない。

この小文は東京大学総合研究資料館植物部門所蔵の標本、及び著者が日本本土、伊豆諸島、種子島、奄美諸島、沖縄本島、小笠原諸島などから集め、東京農業大学図書館特殊資料部標本室に所蔵する標本に基いて行った観察の結果である。

終りに臨み、所蔵標本の閲覧をゆるされた東京大学総合研究資料館植物部門主任大橋広好博士、並びに同部門の大場秀章氏に御礼を申し述べる。

（東京農業大学、伊豆大島ハワイ植物園）